児童養護施設における被虐待児の心理的特徴 4

—トラウマ反応と抑うつについて—

○佐藤淳一¹・林直（非会員）²・市川捨蔵（非会員）³・高野善晴（非会員）⁴・樋口悦子（非会員）⁵・平原富江（非会員）⁶・大矢真里（非会員）⁶

（¹上越教育大学・²双葉寮・³若竹寮・⁴新潟天使園・⁵若草寮・⁶聖母愛児園）

キーワード：被虐待児，PTSD，抑うつ

Post traumatic stress and depression in abused children at protective institution

Junichi SATO¹, Naoshi HAYASHI^{2, #}, Sutezo ICHIKAWA^{3, #}, Yoshiharu TAKANO^{4, #}, Etsuko HIGUCHI^{5, #}, Tomie HIRAHARA^{6, #} and Mari Ooya^{6, #}

（¹Joetsu University of Education, ²protective institution of Futaba, ³Wakatake, ⁴Tenshien, ⁵Wakakusa, ⁶Aijien）

Key words: abused child, post traumatic stress, depression

目 的

現在，児童養護施設における被虐待児への心理的援助は臨床心理士を初めとする心理療法担当員が担っている。心理療法担当員は心理的援助を要する児童に対して適切な心理査定と，それに基づいた心理療法を行うことが求められている。そこで筆者らは，児童養護施設に入所する被虐待経験を持つ児童の心理的特徴を把握するため，被虐待児における自己の全体像の特徴について調査，報告してきた（山田ら，2010；山田ら，2011）。それにひきつづき，今回はトラウマ反応と抑うつについて調査した結果を報告する。

方 法

調査対象は，A 県内の 5 つの児童養護施設（大舎制）に入所している中学生の生徒のうち，入所前に生育歴のなかで被虐待経験が確認されている小学生 12 名（男子 4 名，女子 8 名）ならびに中学生 14 名（男子 11 名，女子 3 名，平均年齢 13.7 歳）であった。対照群は，A 県内の小学生で，一般家庭で生活する小学生高学年 79 名（男子 41 名，女子 38 名），中学生 215 名（男子 110 名，女子 105 名，平均年齢 13.3 歳）であった。なお，各施設の処遇職員や調査参加する児童へは，事前に同意を得ている。

子どもの心的外傷の程度を測定するため，子ども版災害後ストレス反応尺度（富永・高橋・吉田・住本・加治川，2001；Post Traumatic Stress Symptom for Children 15 items: PTSSC15）を用いた。PTSSC15 は，PTSD の代表的な症状からなる PTSD 尺度と抑うつの症状を示す抑うつ尺度から構成されている。

調査方法は，質問紙を個別法ならびに集団法により実施した。質問紙法はフェイスシートとによって構成されている。実施時間は 10 分から 15 分であった。倫理的配慮として，調査への協力は自由であること，途中で離脱できること，個人が特定されることはないことをわかりやすく説明した。調査協力者の様子について調査後のフォローアップも行っている。

結 果

PTSSC15 の α 係数は，小学校高学年において PTSD 反応尺度が 0.89，抑うつ尺度が 0.70，中学生において PTSD 反応尺度が 0.86，抑うつ尺度が 0.77 であった。

小学生高学年における施設群（被虐待経験有群）と対照群の PTSS 尺度得点を比較したところ，施設群は対照群よりも PTSD 得点が有意に高かった（ $p<.01$ ）。

中学生における施設群（被虐待経験有群）と対照群の PTSS 尺度得点を比較したところ，施設群は対照群よりも抑うつ得点が有意に高かった（ $p<.01$ ）。

Table 1

小学生高学年における施設群と対照群の PTSSC15 得点

		施設群 被虐待経験有	対照群		
PTSSC15		(N=12)	(N=79)	t 値	有意差
PTSD	M	26.83	20.91	2.22	*
	SD	11.36	8.14		
抑うつ	M	16.50	14.51	1.21	
	SD	5.71	5.25		

* $p<.05$

Table 2

中学生における施設群と対照群の PTSSC15 得点

		施設群 被虐待経験有	対照群		
PTSSC15		(N=14)	(N=215)	t 値	有意差
PTSD	M	14.00	14.11	0.94	
	SD	9.49	8.57		
抑うつ	M	12.50	8.80	1.99	*
	SD	5.47	6.11		

* $p<.05$

考 察

虐待経験のある小学校高学年の児童は，心的外傷反応を一般家庭の子どもたちよりも高く示していた。これはこれまでの指摘（前橋，2001；吉田・武井・山下，2002）と一致する。一方，虐待経験のある中学生の子どもは，抑うつ反応を一般家庭の子どもたちよりも高く示していた。これまで易怒性，侵入性症状，攻撃的行動の高さ（西澤ら，1999）や敵意感情や不安感情の高さ（坪井・森田・松本，2007）が報告されていることから，抑うつはたんなる気分の落ち込みというより，被虐待経験に由来すると思われる攻撃性，敵意，不安を背景にしたものの可能性，あるいはその後入所による家族との別離体験によるものの可能性などが考えられる。いずれにしろ，心理療法を行うには，こうした側面へのアセスメントや治療的アプローチが必要になると思われる。

入所児童にとって，過去の被虐待経験とともに，家族と離れた環境で生活しなければならないという現在の別離体験もある種の外傷体験となっている可能性も考えられる。今後は，児童養護施設の入所児童のうち，被虐待経験を持たない群のデータを追加して検討する必要がある。